

幼児におけるすべり台あそびの特性

幼児教育選修 甲斐 瞳

I. 問題と目的

子どもたちが一日の戸外あそびの大半を過ごす園庭には、必ず様々な固定遊具が存在している。しかしながら、固定遊具で子どもたちがどのようにあそんでいるのか、固定遊具であそぶことでどのような身体発達が期待されるのかということを保育者はあまり把握しておらず、安全面に注目するのみとなってしまう。固定遊具でのあそびにおいて、保育者が子どもたちの発達に合った適切な援助をすることで、あそび込むことができ、あそびが多様化していくのではないだろうかと考えた。

そこで本研究では、多くの園に設置されている固定遊具、特に、多くの園にある一般的な遊具であり、園にいるすべての幼児があそぶことができ、さらにあそびの発展が期待されるすべり台で子どもがどのようにあそんでいるのか、どのような運動が行われているのかを探ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

岡崎市私立T幼稚園の3歳から5歳の園児477名（15学級）

2. 観察日時

2012年10月26日(金)、29日(月)、30日(火)、11月2日(金)、5日(月)、13日(火)、16日(金)、22日(木)の8日間、午前9時00分～11時、自由遊び時間（園児が外で活動している）の約90分間を観察した。

3. 観察と事例収集方法

観察と、園に許可を得てビデオ撮影を併用した。

観察：子どものあそびを観察し、子どものすべり台への関わり方、子ども同士の会話の記録をとり、事後に事例として記述した。

ビデオ撮影：子どもの基本的運動動作を詳細に捉えるために、すべり台とその周辺がフレーム内に入る位置にビデオカメラを設置し、観察時間すべてを撮影した。ビデオ撮影とその場で簡単な記録を取ることを併用して行い、撮影画像から個人を対象に基本的運動動作の種類と出現数を分析した。

4. 分析と考察の視点

(1)すべり台あそびにおける年齢・性・滞在時間の傾向を考察する。

事例から、すべり台あそびを行った幼児の年齢・性・滞在時間の傾向を考察する。その際、短時間に何度もすべり台を使用した子どもは「1人」とし、5分以上の時間をあけてすべり台を使用した場合は、同一児であった場合でも、「別の子ども」として捉えた。

(2)すべり台あそびを質的に分類し、性別・年齢別の傾向を考察する。

事例から、すべり台あそびを質的に分類し、性・年齢ごとの傾向を考察する。その際、仙田¹⁾による「あそびを捉える観点」に依拠して事例を分類し考察を進めた。

(3)すべり台あそびにおける基本的運動動作の出現数について、性別・年齢別の傾向を考察する。

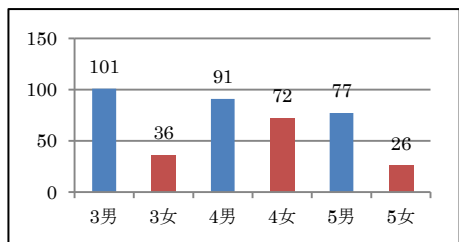
基本的運動動作とその分類(体育科学センター²⁾)を用いて、子どもの基本的運動動作の種類と出現数を分析した。一連のあそびの中で一度でもその動作が行われた場合には、その後繰り返された場合でも1回とした。

Ⅲ. 結果と考察

1. 年齢・性・滞在時間の傾向

1) 年齢・性

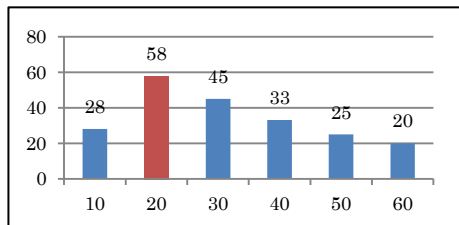
性別では、男児が269人、女児が134人と、男児が女児に比べてすべり台でのあそびを好む傾向が見られ、特に3歳男児が多くあそぶ傾向が見られた。年齢別では、4歳が最も多く、4歳に関しては男女ともに人気のある遊具であることがわかった。



縦軸：出現数 横軸：年齢・性

2) 滞在時間

すべり台での一人あたりの滞在時間はおよそ20~30秒であることがわかった。2秒間から25分間まで時間に幅があり、様々なあそびが見られることがわかった。そのなかで、4歳が最も長い時間あそぶ傾向が見られ、一方5歳はすべり台で長い時間過ごすことがほとんどないことがわかった。



縦軸：出現数 横軸：滞在時間(秒)

3) 一緒にあそぶ人数とあそぶ回数

すべり台で遊ぶことが多い



すべり台で遊ぶことが少ない

すべり台は一人であそぶ傾向が強いことがわかった。特に1人であそぶことが多いのは3歳男児と5歳女児、逆に集団で利用することが多いのは4歳と5歳男児であった。

3歳男児は一人であそぶことが多く、気軽にすべり台を利用できるためあそぶ回数が多い。同じように1人であそぶことの多かった5歳女児は、ごっこあそびやドッジボールなどであそんでおり、すべり台を使う回数が極端に少なかった。そのため大きく人数に差が出たと考えられる。

4歳では、男女共に友達と一緒にすべり台を使う傾向が見られた。しかし女児は始めから友達とあそぶためにすべり台に行くが、男児はたまたまその場に居合わせた子とあそぶ姿が見られた。

4歳では、男女共に友達と一緒にすべり台を使う傾向が見られた。

2. 遊び内容の質的な分類と性別・年齢別の傾向

本研究では、仙田による「あそびを捉える観点」に依拠して事例を分類し考察を進めた。この分類に基づいた事例から、すべり台あそびの性別・年齢別の傾向を考察した結果、すべり台の遊具の機能としての特性が明らかになった。

事例は以下のように分析を行った。

事例：「モンスターをやっつけろ！」 ヨモコ・ナナミ女 ヒロシ男 3歳

子どもの動き	考察
<p>階段をのぼり、滑走面からすべり降りる動作を行っているうちに保育者とジャンケンをし、勝ったらすべり降りる、負けたらすぐられてしまうというゲームが始まった。</p> <p>このゲームを繰り返していくうちに、ヒロシがジャンケンに負けた。ヒロシはくすぐられたくないのか、保育者に「ゴーバスター！」と言いながらパンチをくりだした。保育者は「やられたー」といいながらヒロシがすべり降りるのを見送る。</p> <p>するとその様子を見ていたヨモコとナナミがジャンケンに勝っても負けても「さんしゃいん!」「はっぴーしゃわー!」といって保育者が「やられた〜」というまでワザを繰り出すようになった。「まだまだ!」「効かないぞ」という戦いのやりとりが楽しくなっていく。カスミやコトネもやってきて、恥ずかしがりながらも「はっぴーしゃわー!」とワザを出す真似をする。</p> <p>保育者がすべり台を離れるとそれを追ってプリキュアごっこへと変化した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すべり台の導線が一定になりやすい一方通行性が活かされ、同じ動作をヨモコ・ナナミ・ヒロシが行ったと考えられる。 ・ジャンケンをして勝ったら通っても良いというルールがつき、ゲートあそびが始まった。 ・保育者をモンスターに見立ててあそぶごっこあそびと見て取れる。 ・ヒロシの行動を見て自分も同様にキャラクターやヒーローになりきろうとする模倣が始まった。 ・すべり台でゲームを行うことから、ごっこあそび、そして最終的に保育者とのやりとりが楽しくなったと考えられる。

以下の表は仙田の観点に基づいて、捉えられた事例 238 事例を分類をした結果である。

	発達段階	あそびの種類	事例数	全体数
階段をのぼり、座ってすべる というあそび	機能的あそび段階 103 事例	めまいたあそび行動	48	合計 238 事例
		休息的あそび行動	55	
いろいろ工夫し、 より高度な技術を使ってあそぶ段階	技術的あそび段階 67 事例	挑戦的あそび行動	67	
遊具を媒介として ゲームが始まったりするあそび段階	社会的あそび段階 68 事例	ごっこあそび	7	
		ゲートあそび	28	
		模倣あそび	14	
		追いかけあそび	13	
		ふれあいあそび	6	

すべり台の遊具の機能としての特性

- i) 段差や滑降面をのぼっていくことで得られる高さ
- ii) 柵や手すりによって作られる限られた空間・狭さ
- iii) 滑降面によって生まれる角度
- iv) 地面や下にいる人との距離
- v) 一方通行性
- vi) 鉄棒の強さ

すべり台の遊具としての機能



考察

「あそびの段階の傾向」を見ると、すべり台あそびでは機能的あそび段階が最も多い。男児は機能的あそび段階、女児は社会的あそび段階が多く表れる。3 歳児では、あそび方が未熟なために機能的あそび段階が多く、4 歳はすべり台あそびに工夫が見え始め、技術的あそび段階が多い。5 歳はすべり台であそぶよりも鬼ごっこなどの途中ですべり台を利用するために、工夫する姿が見られない。そのため機能的あそびの割合が高くなる。

「あそびの種類傾向」においては、すべり台あそびでは挑戦的あそび行動が最も多く見られ、社会的あそび段階の中ではゲートあそびが最も多く見られた。男児は休息的あそび行動を多く行う傾向が見られた。

3 歳はゲートあそびが社会的あそび段階のほとんどを占めるのに対し、5 歳は社会的あそび段階に見えるさまざまなあそびを満遍なく行っている。

	よく見られるあそび
男児	<ul style="list-style-type: none"> ・スピードをつけて滑走面を滑る、頭から滑るといったスリルを楽しむあそび ・滑走面を駆け上がる、柵にぶら下がるといった運動自体を楽しむあそび
女児	<ul style="list-style-type: none"> ・ごっこあそびのような見立てあそびや、誰かの真似をする模倣を楽しむあそび ・ゲートあそびなど、友達とかかわることを楽しむあそび
3 歳	<ul style="list-style-type: none"> ・滑走面をよじのぼることは難しいが、階段をのぼり滑走面を滑る基本的なすべり台の使い方をする。 ・4 歳や 5 歳、保育者のあそぶ姿を見て模倣する姿がみられる。 ・同じ動作を何度も繰り返してあそぶことを楽しむ。
4 歳	<ul style="list-style-type: none"> ・滑走面をよじのぼったり、階段をジャングルジムのように使うなど、すべり台をさまざまな用途で遊ぶようになる。 ・ごっこあそびやおにごっこなど、友達とかかわりを中心としたあそびが見られる。
5 歳	<ul style="list-style-type: none"> ・すべり台を使うこと自体が少ないものの、おにごっこやごっこあそびの中で基地や障害物としてすべり台を使う姿が見られる。 ・手を使わずに滑走面を駆け上がるなど、筋力を活かしたあそびを楽しむ。

3. 基本的運動動作の出現数の性別・年齢別傾向

基本的運動動作の出現数と割合

全児(281 事例 403 人)				カテゴリー	動作の内容	主な個々の動作				
順位	動作	出現数	割合	安定性	姿勢変化 ・平衡動作	しゃがむ ねころぶ	起き上がる のる	あるきわたる ぶらさがる		
1	つかむ	305	14%	移動動作	上下動作	のぼる	よじのぼる	すべりおきる		
2	しゃがむ	264	12%		水平動作	あるく	ふむ	すべる	はしる	
3	のぼる	262	12%		回転動作	くぐる	もぐる	はいる	はいりこむ	
4	すべりおきる	253	11%		荷重動作	うごかす	はこぶ	ひっぱりおこす		
5	くぐる	252	11%			もつ	もちあげる	おさえる	ささえる	
6	ささえる	155	7%		操作動作	脱荷重動作	かかえておろす	おりる	もたれる	
7	ぶらさがる	137	6%	捕捉動作		つかむ	つかまえる	つむ		
8	もたれる	122	5%	攻撃的動作		ぶつける	いれる	ふりまわす		
9	はしる	88	4%			ほる	たたく	くずす	ひっばる	
10	よじのぼる	85	4%			ける	わる	なげる		
	その他	304	14%							

※赤色：安定性 緑色：移動動作 黄色：操作動作 右表で色の着いているものは出現した動作を表す。

すべり台あそびでは、性別、年齢別のすべてにおいて、基本的運動動作における安定性、移動動作、操作動作の3カテゴリー8動作内容のすべてが出現していた。多様な運動の動作が確保されることが明らかにされた。

最も出現数が多かったのは操作動作のつかむ動作であった。次いで安定性のしゃがむ動作、3番目に移動動作ののぼる動作であった。しかし出現割合としては上位5つに大きな差はなく、つかむ・しゃがむ・のぼる・すべりおきる・くぐるといった動作が基本的に行われることがわかる。性、年齢、あそびの発達段階に関らず、すべり台あそびに見られる動作はつかむ、のぼる、くぐる、しゃがむ、すべりおきる、が必ず表れることがわかった。

IV. すべり台あそびへの援助についての提案と今後の課題

すべり台は固定遊具の特性として「高さ」「狭さ」「角度」「一方通行性」「強さ」「堅さ」を持ち、性別によって好まれるあそびが違ふこと、年齢が高くなるほどにあそび方が多彩になること、性・年齢・あそびの種類に関らず、すべり台での遊具の特性に依存するために、運動はつかむ動作・しゃがむ動作・のぼる動作が表れることが明らかになった。

これらのことを保育者が意識することで、子どものすべり台あそびを工夫する視点もたらされるのではないだろうか。そこから、保育者は子どもと一緒に遊ぶためのアイデアを生み出すことが可能になると考えられる。

現在、すべり台やブランコが複合して存在するコンビネーションなどがよく見られる。子どもの戸外でのあそびが固定遊具を通してより充実するようにするためにも、さまざまな固定遊具でのあそびを明確に捉えて、より子どもたちの現状にあった遊具とあそびを検討することが今後の課題である。

V. 文献

引用文献

- 1) 仙田満(1984) 建築雑誌 vol. 99, No. 1220, 5月号, 29-31
- 2) 体育カリキュラム作成小委員会(1980) 幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究, I. カリキュラムの基本的な考え方と予備的調査の研究について, 体育科学 8:150-155

参考文献

- ・山田りよ子(2000) 幼児のあそびにおける環境の分析(2) 固定遊具の視点から, 藤女子大学紀要, 第38号, 第II部: 65-71
- ・ミズマ モニカ マリ(2008) 園庭の大型固定遊具の変化に伴う幼児のあそびの変容—はしごからすべり台へ—, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊15号—2
- ・平田めぐ(2011) 幼児におけるジャングルジムあそびの特性, 名古屋柳城短期大学保育専攻科終了論文